

20020021

厚生労働科学研究費補助金

政策推進研究事業

若者の将来設計における
「子育てリスク」意識の研究

平成14年度

総括研究報告書

主任研究者 山田昌弘（東京学芸大学教育学部助教授）

平成15年（2003年）4月

目次

I	総括研究報告	
	若者の将来設計における「子育てリスク」意識の研究	1
	山田昌弘	
	(資料)	1 1
II	研究成果の刊行に関する一覧表	1 3
III	研究成果の刊行物・別刷	1 4

厚生労働科学研究費補助金（政策推進研究事業）

総括研究報告書

若者の将来設計における「子育てリスク」意識の研究

主任研究者 山田昌弘 東京学芸大学教育学部助教授

研究要旨

近年の少子化の原因は、雇用の変化によって、若者が子育てに「リスク」を感じているからではないかという問題意識をもち、子育て期にあたる若者の状況を調査した。今年度は、フリーターや派遣社員と呼ばれる将来の収入に不安を抱える若者27人に対して、インテンシブなインタビュー調査を行った。

その結果、不安定就労の若者は、今のままの状態では、子育てに踏み切れるほどの生活力をもっていないことが確認された。期待する子育ての生活水準が高い一方、将来の収入に不安があるからである。その原因として、①いまだ男性の収入によって子育て生活を支えるという意識の残存。②安定した収入をもつ若者男性の量的な減少、③現在（未婚状態）の生活水準の高さが影響を及ぼしていることが確認された。

そして、「子育てリスク」に直面している若者は、二つのタイプに分類することができる。リスクに対して、将来設計を考えて、戦略的に対応している若者と、リスクを回避しようとする若者である。前者は、期待水準を引き下げたり、収入の安定のための方策を考える。しかし、後者に分類される若者は、将来生活を考えることをせず、とりあえず、今のままの生活を楽しまたいという意識が強くみられた。

不安定就労者が結婚し、子どもを産み育てることを可能にするためには、若者の期待水準を引き下げる啓蒙活動、収入の安定を図るための、若者、特に、女性に対する就労支援が有効であることはいうまでもない。しかし、そのような対策にのらない若者も増えてきたことは確かである。そのような若者に対するインパクトのある政策対応が必要となっている。

A 研究目的

若者の将来生活設計という観点から、少子化の原因を探り、将来動向を予測し、有効な少子化対策を考察することを研究の目的とする。

本節では、近年の少子化の原因に関する仮説を提示し、具体的な研究目標についての考察を提示する。

A-1。少子化の動向についての再検討

少子化の原因に関しては、諸説あるが、従来の研究では、「結婚したい、子どもを持ちたい」という意欲が問題とされた。しかし、諸調査が示すところによると、多くの若者は、結婚したい、子どもを持ちたいという希望をもっている。それでも、少子化が止まらないのは、若者の「結婚、子育て」意欲というよりも、その希望の実現可能性を検討することが、少子化問題解明の鍵なのではないだろうか。そういった意味での若者の希望の実現可能性に関する研究はほとんどなかった。

一般に生活をする場合、次の二つの欲求が普遍的に存在すると仮定してもよいだろう。

- ①家族を持ちたい（結婚したい、子どもを持ちたい）という欲求。
- ②一定以上の生活水準を保ちたいという欲求も存在

そこで、若者が結婚し、子どもを産み育てる条件としては、「結婚し、子どもを育てながら、一定以上の生活水準が保てるという見通し」がある場合に限られる。

逆をとれば、「結婚子育て期にある若者の期待と現実のギャップ」が少子化をもたらすと考えられる。

そこで、社会科学的分析に乘せるため、次ページの図のように、「子育てリスク変数」を設定する。

図1 子育てリスク変数の定義

- A. 結婚・子育て生活に期待する生活水準
- B. カップルが稼ぎ出せる所得水準の将来「見通し」
- A - B 子育てリスク変数

B > A (子育てリスク変数がマイナス) 結婚し、子どもを産む行動をとる
 A > B (子育てリスク変数がプラス) 結婚しない、子どもを産み育てない

戦後のA、B、及び子育てリスク変数の動向を概観すると、次のようになると考えられる。

図2 戦後の子育てリスク変数の動向

	A	B	子育てリスク変数	
	(期待生活水準) (若者の所得見通し)			
1945 - 1955	急上昇	上昇	+上昇	急速な少子化
1955 - 1975	上昇	急上昇	±一定	出生率安定
1975 - 1990	上昇	不変化	+上昇	緩やかな少子化
1990 - 現在	不変化	低下	+上昇	少子化の継続

近年の少子化の動向を概観すると、1975年から1990年頃までは、未婚者の生活水準の上昇(親に基本的な生活を依存するパラサイト・シングルの登場)によって、結婚後期待する生活水準が上昇したことによって、結婚を控える人が増え、結果的に少子化がもたらされたと考えられる。つまり、夫婦で期待できる収入が、上昇する生活期待水準に追いつかない結果だと考えられる。

しかし、近年の少子化の動向は、それとは別の要因が加わっている。国立・人口問題・社会保障研究所が2002年に出した日本の将来推計人口の中でも、1990年以降、未婚化、晩婚化の影響に加え、結婚している夫婦の出生力が落ちていることが確認されたことと連関している。

A-2. 少子化の原因の構造転換 「子育てリスク」意識の浸透仮説

近年の典型的に生じている少子化は、若者が子どもを産み育てる経済的基盤が「不確実」となっていることにあるのではないかと。1995年頃からの男性雇用が悪化し、将来の長期的な収入見通しが立たないこと（不確実化、リスク化）が、若者の結婚行動や出産行動を手控える原因ではないだろうか。

その前提として、次のような意識が強いことが影響しているのではないかと。

- ①男性一人の稼ぎで妻子の生活を支えるという意識の残存
- ②経済の構造転換による男性不安定雇用者の増大やリストラ不安の増大
- ③豊かな結婚生活をしたい、子どもに多くの費用をかけたいという意識、その費用負担が長期間（高等教育から結婚費用、学卒後の費用）続くという意識の残存

これらの意識がどの程度浸透しているかについて、調査によって明らかにしていくことが、本調査研究の目的である。

B 研究方法

研究期間を二年間とし、一年目に、インタビュー・調査によって、若者の意識の構造を明らかにし、二年目に、大規模な質問紙調査を実施し、意識の分布構造を調査する予定である。

本年度（平成14年度）は、将来の子育てリスク意識が高い層へのインテンシブなインタビュー調査を行い結果をまとめた。本調査は、15年度実施予定の数量調査のパイロット調査の役割も果たしている。

* 調査対象の設定

結婚、出産、子育て期にある若者を対象にする。若者の定義は、おおむね25-35歳とする。

子育てリスク変数は、未婚者に限らず、既婚者にも浸透しており、その結果、産み控えが起きていると推察されるが、調査規模の限界から、特に、未婚の不安定就労者をサンプルとする。経済の構造転換により、フリーターや契約社員といった働き方をする人が若い人の間で増大しており、その層の結婚、子育て意識をみることで、若者全般のリスク意識の「先端部分」を見ることになり、意識構造

を明らかにし、方向性を見出すことができると考えられる。

ここで、不安定就労者は、正社員として企業や官庁等に勤務している以外の若者をさす。それは、将来の安定的な収入が保証されていないという意味で選定した。具体的には、アルバイトのみを行っているいわゆるフリーターから、契約社員、派遣社員を想定した。

主任研究員、研究協力者、リサーチ・レジデントのもつ個人的ネットワークを活用し、インタビュー協力者を個人的に募る方式をとった。住民票などでのサンプリングでは、非効率である上、長時間のインタビューを行うために、ランダムに選ぶことは難しいために、このような方式をとった。

男女、首都圏－地方（青森、鹿児島）、親同居－独居、学歴などをバランスを考慮して、リストの中から対象を選定し調査した。

対象者は、27名となった。

地方 7名（青森5名、鹿児島2名） 男性4名、女性3名

東京20名 男女10名ずつ

* 調査内容

リスク意識がどの程度浸透しているか、そのリスクに対してどのような対応をしているかをインテンシブに聞き取りを行った。電子媒体に録音し、後に、スクリプトを作成した。

調査項目に関しては、研究協力者、リサーチレジデント、大学院生等と、検討を行い、家族関係、職歴の他、将来の生活設計について、詳細に質問した。（資料1に添付）

<倫理面への配慮>

インテンシブなインタビューであり、個人に関する情報を含むため、調査の前に、調査目的を説明し、録音の同意をとった。録音内容に関しては、個人名が特定できないような形での分析、公表を約束した。また、連絡をもらえれば、話した内容の一部、または、全部を公表しないように養成することができることを説明した。

C。研究結果

D。考察

不安定就労者へのインタビューからみえてきたのは、期待する生活水準と現実の経済基盤の将来見通しの間のギャップがあることは「認識」されている。それも、男性と女性では、まったく異なった形で認識されていることが分かった。仮説に設定したように、子育てリスク意識が高まっていることが推定される。研究結果と考察が分かちがたく結びついているので、合わせて示す。

C-1. リスク意識の構造

男性 現在の収入では、妻子を養っていくに足りないと認識している。これは、恋人がいる場合も、いない場合も同様であった。

女性 期待する生活水準を達成するために必要な収入を稼ぐ男性に出会わない。

恋人がいる人であっても、その恋人の収入が期待する収入の水準に達していない。

① 男性にも、女性にも、男性一人の稼ぎで生活するのが原則という意識が強い
女性（34歳、一人暮らし、短大卒）「私は扶養の範囲で働きたい」

男性（30歳、一人暮らし、高卒）「女性（妻）に生活頼るとするのは、男としてしたくない」

男性（27歳、親同居、大卒）「フリーターだと結婚できない」

女性（25歳、親同居、大卒）「子どもを産むとなると仕事を減らさなければならぬので、収入の面で不安」「今の彼は、正社員1年目で収入がない」

② 不安定な雇用の継続

男性（27歳、一人暮らし、大卒）「彼女と結婚したいし、子どもも欲しい、しかし、収入の見通しがたつか、たたないか分からない」

女性（18歳、親同居、高校中退）「いままでつきあった人は私から借金ばかりしていた、せめて借金しない人とつきあいたい」

男性（27歳、親同居、高卒）「正社員に登用されるという話もあるが、結局は話だけで終わりそう」

男性（22歳、親同居、高卒）「今のバイト先で正社員になれば、嫁さん来るはず」

③ 豊かな結婚生活をしたい、子どもをもって貧乏になるのはイヤだ（現在している生活が豊かであることが前提）

女性（34歳、一人暮らし、短大卒）「（結婚するなら）自由に使える小遣いは月5万縁以上、年に一度は海外旅行に行きたい」

女性（25歳、親同居、大卒）「基礎化粧品を輸入しており、月10万円くらいかかる」

C-2. 合理的行動モデルの限界

期待と現実のギャップ（子育てリスク）の存在に対して、若者はどのような意識をもち、どのような行動をとろうとしているかを調査した。

<合理的人間の仮説>

仮説としては、「合理的人間モデル（モダン・モデル）」を考え、期待と現実のギャップがあれば、ギャップを埋める行動をしようとする動機付けが働くと仮定した。その方法としては、期待水準の引き下げ（妥協）と現実の収入の引き上げ（努力）の二方向が考えられる。

妥協とは、将来結婚、子育ての期待する生活水準を引き下げることであり、例として、期待する結婚生活のレベルを下げる、子どもにお金をかけるのを諦めるなどが考えられる。一方、努力とは、現実の将来の収入水準の引き上げであり、定職に就いたり、自分の収入を安定させ、増加させる努力をする（男性）共働きを前提にして、二人の収入で暮らす方策を考える、収入の高い男性を見つける（女性）などが考えられる。

事例調査の結果で分かったことは、合理的人間モデルがあてはまる人間とそうでない人間が存在するということである。本調査で得られた最大の成果である。

合理的人間の例として、インタビューから抜粋する。

女性（25歳、親同居、大卒）「今つきあっている人の収入は高くないから、もっと高い人と出会えるために、いろいろな出会いの場に行っている」

男性（26歳、親同居、大卒）「将来結婚したいから、非常勤講師で教員採用試験を受け続けながら、社会福祉士の勉強を始めた」

女性（29歳、一人暮らし、専門）「イラストレーターになって結婚している、結婚はともかく、イラストレーターの方にはなれるだろう」

<仮説の修正>

しかし、調査する過程で見出されたのは、「ポスト・モダン的人間モデル」と

いうべきものである。それは、期待と現実のギャップを放置しても苦痛ではないという人間類型の出現である。

近年の欧米での社会意識論の中で、近年の社会意識の特徴として、「自我の分裂」が発生しているという指摘がなされている。(Arlie Hochschild 1997 'Time Bind - Work become home Home become work'など参照)。また、私の行ったフリーター意識調査においても、単純使い捨て労働者という現実を「夢(いつかどこかに理想的な仕事や生活があるに違いない)」というファンタジー」で埋める傾向が見出された(山田昌弘 2001『家族というリスク』)

つまり、「夢」「ファンタジー」 期待と現実のギャップを放置しておくための装置として機能しているということである。「とりあえず、今は生活ができていいる」という現実が、期待と現実のギャップを放置しておくことを許している。

<将来の生活設計の特徴>

「あなたの10年後はどうなっているか」という質問をぶつけたところ、次のような回答が典型的であった。

男性フリーターは、今のままの日常が続くと回答した人が多い

(男性34歳、高卒、運送業バイト)「体が健康なら、バイトしながら、(ほとんどお金にならない)音楽作品を作り続けるという今の生活が続いているのでは」
(男性29歳、バイトを掛けもち、彼女有り)「キッチンの仕事が面白いが、独立するのは大変だからいやだ。」

(男性25歳、バイトを掛けもち)「夢はラッパー(ダンサーの一種)だけれども、無理だと分かっている。今の生活を続けるしかない」

(男性27歳、バイト掛けもち、親同居、彼女なし)「家を出ないとやばいと思っているが、貯金などをしていく訳ではない。毎日の仕事に追われていて、将来のことをきちんと考える余裕がない」

(男性29歳、単純労働、親から仕送り)「クリエイティブな仕事に今はつきたいと思っているけど、昔みたいに営業やってるのかな」

一方、女性フリーターは漠然と結婚しているはずという回答が多い

女性(34歳、一人暮らし、短大卒、彼有り)「40歳で結婚していない自分なんて考えられない、けれど、今つきあっている彼と結婚するという気分ではない」

女性(25歳、保健婦志望、彼なし)「結婚、結婚していないは半々、二人で仕事続けられたらいいな。結婚していなければ、趣味と仕事」

また、男性と同じように、今のままの生活が続くと思っている人もいる。
女性（25歳、親同居、高卒）「(イソップ物語の)アリとキリギリスならキリギリスでいい。将来のこと考えず、好きなことをしていきたい」

このような夢を見続けられる条件として、次の4点を調査した若者に共通する特徴として抽出することができる。

- ①親の援助+とりあえず生活することに不自由はない仕事状況
- ②将来を考えることを忘れさせてくれる道具の存在（時間を埋めるもの パイト）
- ③運を信じる
- ④家族負担が存在しない

E 結論

* 合理的政策対応の必要性

「結婚したい、子どもを産みたい、けれども、障害があるから産めない」ということが、少子化の主因であるから、それに対して、出生促進策をとることは、十分正当性がある。

今までの政府等の対策は、「子育てリスクの存在」に対して、期待する生活水準と現実の収入のギャップを埋めるように誘導することを主眼としてきた。これを「少子化に対する合理的政策的対応」と呼んでおく。

A ギャップを埋める努力を支援したり、子育てリスクの軽減政策

夫婦二人で、収入の長期的見通しを立てられるようにすることが必要である。

- ① 雇用の安定化、長期的見通しを立てる環境作り（雇用対策）
- ② 男女共働きで、二人分の収入をもって生活できる環境作り（保育園、育児休業）
- ③ 子育て、教育費にかかるお金を軽減する（奨学金、児童手当、親保険、塾費用援助）

若者の生活基盤が揺らいでいるとき、将来生活に対するリスクヘッジの最大のものは、夫婦共働きであることは間違いない。それを促進する政策が必要である。

B 妥協を促進 期待する生活水準を送ることを諦めさせる（啓蒙活動）

これには、男女の出会いの支援（これは、期待を妥協に導く教育啓蒙効果）や、男一人で稼ぐという意識を諦めさせることが主眼となる。

* 合理的政策対応の限界

しかし、合理的政策では動かない若者が出てきたことは事実であり、夢や永遠に続くと思っている現実を生きる若者が将来迎える道はどうか不安である。そこには、少子化をくい止めなければならない最大の理由は夢を見ながら歳をとっていく若者たちが夢から覚めたとき、どういう行動をとるかわからない。

つまり、子どもをもちたいと漠然と思っている、「インパクト」（もしくは外的強制）がなければ、夢見る若者は、夢をみたま歳をとる

個人的インパクトとしては、「できちゃった婚」で示されるように、若者を妥協をせざるをえない状況に追い込むことが一つのきっかけにはなるが、そのような実態が、望ましいとはとてもいえない。

インパクトをもたらす政策を考える必要がある時期に来ている。

15年度は、インタビュー調査で得た知見をもとに、大量サンプルの調査を行う予定であり、リスク意識の程度の量的分布や期待と現実のギャップをどのように埋めようとするのか、放置するのかの量的分布を調査し、合理的政策対応がどの程度有効かを見極める基礎資料としたい。

山田調査 質問項目 (案)

時間：1時間程度

項目

1) 生活について 2) 仕事について 3) 恋人や恋愛について 3) 家族との関係について

項目それぞれは、以下の質問から構成される

a)現状はどうなっているのか b)現状にたどりつくまでの経過と満足度 c)これまでの経歴

d) これからの展望 (現実的な見込み、本人の希望、希望が実現されるための条件、を分けて聞く)

↑これがこの調査の肝となる部分ですので注意

*話の流れとしては1) -d) を最後に聞いた方がよいと思われますので、質問はそういう形で組んであります。

フェイスシート

名前

年齢

居住地区

世帯構成 (一人暮らしかどうか)

住居形態 (マンションか一戸建てか)

*家族構成については後で詳しく

1) あなたの平均的な一日について聞かせてください。

a)現状

- ・朝起きて眠るまでのタイムスケジュール
- ・週何日働いていて、仕事以外ではどのようなことをしているか
- ・休日や仕事が終わった後は何をしているのか

b)経過と満足度

- ・今の生活に不満などはありますか
 - ・満足している部分はどこですか
 - ・10点満点だと何点ぐらいですか
- *経過は仕事とからめて2)で聞く

2) あなたの仕事について聞かせてください

a)現状

- ・現在どういう仕事をしていますか?
- ・時給はいくらぐらいですか? 大体の月収/年収はどれぐらいですか?
- ・そのうち自由になるお金はどれぐらいですか? (聞ければ、実家に送金しているかどうか)

b)経過と満足度

- ・その仕事を始めたのはなぜですか
- ・どうやってその仕事をみつけましたか
- ・現在の仕事を始めて、生活していく上で良くなったこと、悪くなったことはありますか
- ・今の仕事に不満などはありますか。満足している部分はどこですか
- ・10点満点だと何点ぐらいですか

c)経歴

- ・学卒後の仕事の経歴について教えてください

d)展望

- ・これからも現在の仕事を続けていきたいですか? (希望)
- ・それは実現可能だと思いますか? (見込み)
- ・実現するためには何が足りないと思いますか? どうすればよいと思いますか? (条件)

3

2) 恋人や恋愛についてうかがいます

a)現状

- ・現在つきあっている人はいますか? (いなかったらd)の2番目に飛ぶか、昔の恋人のことでよい)
- ・相手の仕事、居住形態、簡単な住所、対象者の自宅との距離
- ・自分や相手の両親は、つきあっていることを知っているか

b)経過と満足度

- ・いつからつきあっていますか?
- ・つきあうようになったきっかけは?
- ・今の恋愛に不満などはありますか? 満足している部分はどこですか?

c)経歴

省略：聞けそうだったら、今までの恋愛遍歴を簡単に聞けるとよい

d)展望

- ・今の相手と、結婚したいと思いますか？子供は欲しいですか？（希望）
- 上でNOと答えた場合、または恋人がいない場合は
 - ・将来（相手は誰かわからないとしても）結婚したいと思いますか？子供は欲しいですか？（希望）
 - ・それは実現可能だと思いますか？（見込み）
 - ・実現するためには何が足りないと思いますか？どうすればよいと思いますか？（条件）
 - ・以上のことについて、恋人と話し合ったことはありますか？話したいと思いますか？

4) 3) 家族との関係についてうかがいます

a) 現状

- ・今は一人暮らしですか？親と同居ですか？
- ・両親は働いていますか？いつまで働く予定でいると思いますか？
- ・兄弟姉妹はいますか？
 - それぞれの職種、既婚かどうか、簡単な住所

b) 経過と満足度

- ・一人暮らしの場合：どういうきっかけで一人で住むようになりましたか？
- ・親と同居の場合：どうして一緒に住んでいるのですか？
- ・両親とは仲良くできていますか？

d) 展望

- ・両親はどういう老後を過ごしていくと思いますか？（展望）
- ・一人暮らしの場合：両親と一緒に住むことはあると思いますか？（展望）
- ・実家住まいの場合：結婚やその他の理由で、家を出ることはあると思いますか？（展望）
- ・それは実現可能だと思いますか？（見込み）
- ・実現するためには何が足りないと思いますか？どうすればよいと思いますか？（条件）

4) これからの展望について

- ・10年後、自分は何をしていると思いますか？
- ・10年後、社会はどのようになっていると思いますか？

II 研究成果の刊行に関する一覧表

1. 研究報告会

平成14年度厚生労働科学研究 政策科学推進研究事業発表会 2002,2,27
「若者の将来設計における「子育てリスク」意識の研究」

2. 新聞発表（予定）

日本経済新聞 4月23日夕刊掲載予定
「若者の雇用不安 少子化進行の一因に」

若者の将来設計における「子育てリスク」意識の研究 (中間報告)

東京学芸大学教育学部助教授 山田昌弘

0. はじめに 本報告の仮説

近年(おおむね1995年以降)の少子化の特徴

① 少子化の原因の構造変化

* 若者の将来生活の不安の深刻化

② 合理的行動モデルの限界

若者の行動様式のポスト・モダン的变化(内外の社会学者の指摘)

* 理想と現実のギャップを埋める行動を行わない若者の登場

③ 合理的政策的対応の限界

政策は、人間は合理的に行動するはずという前提のもとになされる

* 「夢」を追い求める非合理的行動をする一部の若者に対しては効果が薄い

* インパクトのある政策

1 少子化の原因の構造変化

<仮説>

家族をもちたい(結婚したい、子どもをもちたい)という欲求自体は存在
同時に、一定以上の生活水準を保ちたいという欲求も存在

* 結婚子育て期にある若者の期待と現実のギャップが少子化を生み出す

A. 結婚・子育て生活に期待する生活水準

B. カップルが稼ぎ出せる所得水準の将来「見通し」

$B - A$ 子育てリスク変数

$A > B$ なら結婚しない、子どもを産み育てない

1945-1955 Aの急上昇 Bの上昇 急速な少子化

1955-1975 Aの上昇 Bの急上昇 人口定常

1975-1990 Aの上昇 Bの不変化 緩やかな少子化

(パラサイト・シングル仮説 親元での生活が豊かなため、期待する生活水準が上昇)

1990-現在 Aの不変化 Bの低下、不確実化 少子化の継続

* 少子化の原因の構造転換 「子育てリスク」意識の浸透仮説

近年の典型的に生じている少子化は、若者が子どもを産み育てる経済的基盤が「不確実」となっていることにあるのではないか。1995年頃からの男性雇用が悪化し、将来の長期的な収入見通しが立たないこと(不確実化、リスク化)が、若者の結婚行動や出産行動を手控える原因ではないか。

前提として、

- ①男性一人の稼ぎで妻子の生活を支えるという意識の残存
- ②経済の構造転換による男性不安定雇用者の増大やリストラ不安の増大
- ③豊かな結婚生活をしたい、子どもに多くの費用をかけたいという意識、その費用負担が長期間（高等教育から結婚費用、学卒後の費用）続くという意識の残存

<本研究の調査設計>

本年度（平成14年度）

将来の子育てリスク意識が高い層へのインテンシブなインタビュー調査を行う

未婚化が進む25-35歳の未婚不安定就労者をサンプルとする。

（不安定就労者- 将来の所得が不安定な人、フリーター、契約社員など）

男女、首都圏-地方（青森、鹿児島）、親同居-独居、学歴などの軸で、対象を選定
リスク意識がどの程度浸透しているか、そのリスクに対してどのような対応をしているかを詳細に調査中（研究協力者、リサーチレジデント、大学院生の協力）

来年度（平成15年度）

インタビュー調査の結果を基に、調査票を設計し、東京、関西圏、地方の3地点で25-34歳の若者に質問紙調査を行い、リスク意識が高い層がどの程度いるのか、どのような対応をとれば結婚や子どもをもつのかを調査

<事例調査の結果（途中経過）概要>

いわゆる不安定就労者へのインタビューからみえてきたのは、期待する生活水準と現実の経済基盤の将来見通しの間のギャップがあることは「認識」されている。それも、男性と女性では、まったく異なった形で認識されていることが見て取れた。

男性 現在の収入では、妻子を養っていくに足りないことを認識している。これは、恋人がいる場合も、いない場合も同様。

女性 期待する生活水準を達成するために必要な収入を稼ぐ男性に出会わない。

恋人がいる人であっても、その恋人の収入が期待する収入の水準に達していない。

① 男性にも、女性にも、男性一人の稼ぎで生活するのが原則という意識が強い

女性（34歳、一人暮らし、短大卒）「私は扶養の範囲で働きたい」

男性（30歳、一人暮らし、高卒）「女性（妻）に生活頼るとするのは、男としてしたくない」

男性（27歳、親同居、大卒）「フリーターだと結婚できない」

女性（25歳、親同居、大卒）「子どもを産むとなると仕事を減らさなければならないので、収入の面で不安」「今の彼は、正社員1年目で収入がない」

② 不安定な雇用の継続

男性（27歳、一人暮らし、大卒）「彼女と結婚したいし、子どもも欲しい、しかし、収入の見通しがたつか、たたないか分からない」

女性（18歳、親同居、高校中退）「いままでつきあった人は私から借金ばかりしていた、せめて借金しない人とつきあいたい」

男性（27歳、親同居、高卒）「正社員に登用されるという話もあるが、結局は話だけで終わりそう」

③ 豊かな結婚生活をしたい、子どもをもって貧乏になるのはイヤだ（現在している生活が豊かであることが前提）

女性（34歳、一人暮らし、短大卒）「（結婚するなら）自由に使える小遣いは月5万縁以上、年に一度は海外旅行に行きたい」

女性（25歳、親同居、大卒）「基礎化粧品を輸入しており、月10万円くらいかかる」

2. 合理的行動モデルの限界

* 期待と現実のギャップ（子育てリスク）の存在に対して、若者はどのような意識を持ち、どのような行動をとろうとしているか。

<仮説>

* 合理的人間モデル（モダン・モデル）ギャップを埋める行動をする
期待水準の引き下げ（妥協）と現実の収入の引き上げ（努力）

期待水準の引き下げ（妥協）

例 期待する結婚生活のレベルを下げる
子どもにお金をかけるのを諦める

現実の収入水準の引き上げ（努力）

例 定職に就いたり、自分の収入を安定させ、増加させる努力をする（男性）
共働きを前提にして、二人の収入で暮らす方策を考える
収入の高い男性を見つける（女性）

<事例調査の結果>

* 合理的人間モデルがあてはまる人間とそうでない人間が存在する

合理的人間の例

女性（25歳、親同居、大卒）「今つきあっている人の収入は高くないから、もっと高い人と出会えるために、いろいろな出会いの場に行っている」

男性（26歳、親同居、大卒）「彼女と結婚したいから、消防士になるという夢を諦めて、就職活動をし始めた」

（以上の2例は、本調査前の生命保険文化センターのデータの援用）

女性

女性（29歳、一人暮らし、専門）「イラストレーターになって結婚している、結婚はともかく、イラストレーターの方にはなれるだろう」

<仮説の修正>

* ポスト・モダン的人間モデル

期待と現実のギャップを放置しても苦痛ではない

近年の社会意識論、「自我の分裂」が発生しているという議論

Arlie Hochschild 1997 'Time Bind - Work become home Home become work'

現実の家族（時間に追われる生活）と理想の家族（リラックスできる家族）のギャップをファンタジーで埋める

山田のフリーター調査 単純使い捨て労働者という現実を「夢（いつかどこかに理想的な仕事や生活があるに違いない）」で埋める。（山田昌弘 2001『家族というリスク』）

「夢」「ファンタジー」 期待と現実のギャップを放置しておくための装置として機能

「とりあえず、今は生活ができています」という現実、期待と現実のギャップを放置しておくために

<事例調査の結果>

* 10年後はどうなっているかという質問

男性フリーターは、今のままの日常が続くと回答した人が多い

（男性34歳、高卒、運送業バイト）「体が健康なら、バイトしながら、（ほとんどお金にならない）音楽作品を作り続けるという今の生活が続いているのでは」

（男性29歳、バイトを掛けもち、彼女有り）「キッチンの仕事が面白いが、独立するのは大変だからいやだ。」

（男性25歳、バイトを掛けもち）「夢はラッパー（ダンサーの一種）だけれども、無理だと分かっている。今の生活を続けるしかない」

（男性27歳、バイト掛けもち、親同居、彼女なし）「家を出ないとやばいと思っているが、貯金などをしていく訳ではない。毎日の仕事に追われていて、将来のことをきちんと考える余裕がない」

（男性29歳、単純労働、親から仕送り）「クリエイティブな仕事に今はつきたいと思っているけど、昔みたいに営業やってるのかな」

女性フリーターは漠然と結婚しているはずという回答が多い

女性（34歳、一人暮らし、短大卒、彼有り）「40歳で結婚していない自分なんて考えられない、けれど、今つきあっている彼と結婚するという気分ではない」

女性（25歳、保健婦志望、彼なし）「結婚、結婚していないは半々、二人で仕事続けられたらいいな。結婚していなければ、趣味と仕事」

夢を見続けられる条件

- ①親の援助+とりあえず生活することに不自由はない仕事状況
- ②将来を考えることを忘れさせてくれる道具の存在（時間を埋めるもの バイト）
- ③運を信じる
- ④家族負担が存在しない

3 合理的政策的対応の限界

* 少子化に対する合理的政策的対応

期待する生活水準と現実の収入のギャップを埋めるように誘導すること

A 努力を支援 子育てリスクの軽減政策

夫婦二人で、収入の長期的見通しを立てられるようにすること

- ① 雇用の安定化、長期的見通しを立てる環境作り（雇用対策）
- ② 男女共働きで、二人分の収入をもって生活できる環境作り（保育園、育児休業）
- ③ 子育て、教育費にかかるお金を軽減する（奨学金、児童手当、親保険、塾費用援助）

リスクヘッジの最大のもの 夫婦共働きであることは間違いない

B 妥協を促進 期待する生活水準を送ることを諦めさせる（啓蒙活動）

男女の出会いの支援（これは、期待を妥協に導く教育啓蒙効果）

男一人で稼ぐという意識を諦めさせる

* 合理的政策対等の限界

しかし、合理的政策では動かない若者が出てきたことは事実

夢や永遠に続くと思っている現実を生きる若者が将来迎える道はどうなるのか

少子化をくい止めなければならない最大の理由は夢を見ながら歳をとっていく若者たちが夢から覚めたとき、どういう行動をとるか

「インパクト」（もしくは外的強制）がなければ、夢見る若者は、夢をみたま歳をとる個人的インパクト 「できちゃった婚」

（若者を妥協をせざるをえない状況に追い込む）

インパクトをもたらす政策はあるか？

ロバート・ライシュ 『勝者の代償』 「若者に一律10万ドルの独立資金を」

4. 15年度調査に向けて

15年度は、インタビュー調査で得た知見をもとに、大量サンプルの調査を行う予定
リスク意識の程度の量的分布

期待と現実のギャップをどのように埋めようとするのか、放置するのかの量的分布
（合理的政策対応がどの程度有効かを見極める基礎資料となりうる）